

現在の皇居の礎は江戸城だった！

江戸の中核・江戸城のひみつに迫る

戦国時代から天下統一を経て太平の世を迎えたことで、城の在りかたにも変化があらわれる。ここでは江戸城の変化から、その一部をもとにした皇居の状況までをまとめて紹介しよう。

防御を視野に入れた 渦巻き状の渦郭式

家康が入国した当時の江戸城は芝土手の上に建ち、石垣はどこにもなく、堀は空堀（水を湛えていない安い造りの堀）、玄関の登り板は船板を代用していたほど、お粗末なありさまだった。

江戸城の大規模な築城工事は一六〇三（慶長8）年からはじまった。当時、敵対関係にあった豊臣家との戦に備えて、その構造は防御に徹していた。

江戸城郭は渦郭式であった。これは大手（正門）から入って、渦巻き状に三丸（重臣たちの屋敷）、二丸（將軍の近親者の屋敷）を経なければ將軍のいる本丸へと辿り着けないという構造である。敵が本丸へ攻め込むまでに時間稼ぎができるというわけだ。

さらに本丸内部を覗いてみると、本丸の

中にもう一つの郭を造り、そこに天守が存在するという環立式の形態をとって防御性を高めている（図参照）。

江戸城随所にみられる石垣にも敵を意識した造りが施されている。江戸城では立方体に切り出した石を積んで石と石の隙間を少なくする「切込みハギ」という手法が使われている。積みかたに工夫があり、石垣上部へ向かって反り返るようにすることで敵の侵入を妨げるのである。そのことになみ、この勾配は「武者返し」と呼ばれる。

天下統一を経て 城郭は単立式へ

大坂の陣で豊臣家が滅び天下泰平の時代を迎えると、本丸は環立式から単立式へと形態を変える（図参照）。天守を敵から守るという必要性が薄まったからである。

江戸城の造りを防災という観点でみるこ

ともできる。軒裏に剥き出しになった垂木の部分を漆喰で塗り固めて木の部分を覆い、外壁には土を塗って土蔵のようにすることで防火性を高めていた。

また、天守の最上階には金の鯨が載っていた。鯨は、魚の胴体と竜や獅子の頭を持ち口から水を吹いて雨を降らせ、火を消し止める力があると伝えられて、それにあやかっただけである。

明暦の大火で 焼失した天守閣

江戸時代は当然ながら木造の建物が多く火災に脆かった。それゆえ、防火の工夫が施されていたのだが、それでも一六五七（明暦3）年の明暦の大火で江戸は街の大部分、そして城の天守までもを焼失した。この火災の経験で、水堀で隔てるだけでは充分な防火効果は得られないと悟った幕府は、そ

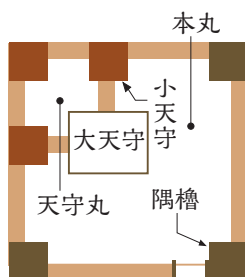
れまで郭内に置いていた御三家（尾張、紀伊、水戸）の上屋敷を郭外へ移し、「火除け地」と呼ばれる空き地を設けた。

また、焼失した天守は当初は以前とほぼ同規模のものを再建する予定であったが当時の4代将軍家綱の叔父であった保科正之が「この平和な時代に立派な天守は意味がなく、江戸の街全体を再建しなくてはならない。今ここに費用をかけるのは無駄である」と助言し計画は立ち消えとなった。

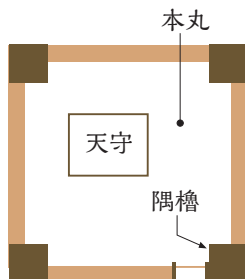
ところで、天守の建設にどれだけの費用がかかるのだろうか。一七一二（正徳2）年の天守再建計画によると、天守を建てるのに約10万7000両の費用がかかると試算されたという。江戸中期の1両の価値は現代の金額で4〜6万円相当なので、1両≡5万円として換算すると、天守一つ建てるために53億円あまりの莫大な資金を必要とする計算になる。

天守再建は断念したものの天守の形をした櫓を建てこれを権力の象徴とした。その櫓は「富士見櫓」と呼ばれ、現在も皇居の敷地内にそびえ立っている。ほかにも皇居には江戸のまま姿を留めている構造物がいくつかある。機会があれば是非立ち寄って江戸の断片に触れてほしい。

江戸城天守の形態変化

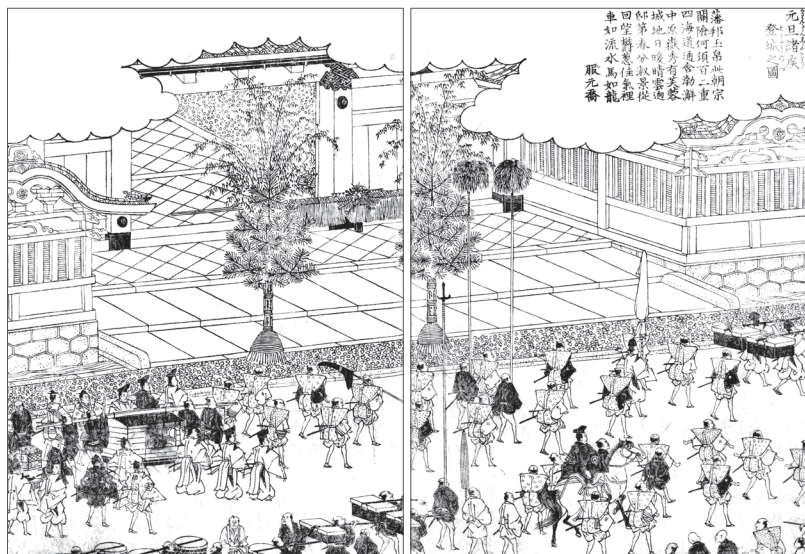


【環立式】家康時代の江戸城の構造。本丸の周りに小天守を環状に連立することで、本丸に攻め込まれた場合も天守丸で籠城が可能となる。



【単立式】家光時代の江戸城。本丸が単独で立つ、平和な時代にあわせた構造といえる。

『ビジュアル版 城の日本史』（内藤昌編著）などをもとに作図



正月の三が日や八朔の日などの行事、毎月定例の登城日には、大名は行列を仕立てて登城した。図は元旦の大名屋敷前の風景。『江戸名所図会』（国立国会図書館蔵）



明暦の大火で焼失した江戸城の天守の再建計画図。実際に再建されることはなかった。『江戸御城御殿守正面之絵図』（都立中央図書館特別文庫室所蔵）



江戸城の二の丸付近。写真は明治時代に撮影されたもの。『宮城二の丸附近』（都立中央図書館特別文庫室所蔵）

